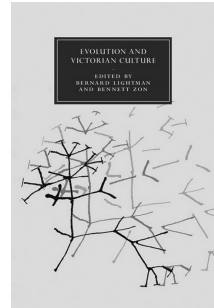


書 評

Bernard Lightman and Bennett Zon, eds.,
Evolution and Victorian Culture
 (Cambridge: Cambridge University Press, 2014)



藤田 祐

ヴィクトリア時代の科学を対象とした様々な業績を残している科学史研究者の Bernard Lightman と 19 世紀イギリスの音楽史を研究している Bennett Zon が編集した *Evolution and Victorian Culture* は、タイトルの通り、進化という概念とヴィクトリア時代の文化との関係を考察する論文集である。進化との関係で取り上げられているのは、小説 (第1章)、詩 (第2章)、写真 (第3章)、映画 (第4章)、美術 (第5章)、舞台芸術 (第6章)、ダンス (第7章)、音楽 (第8章)、建築 (第9章)、博覧会や博物館の展示 (第10章)、一般民衆への普及 (第11章) であり、様々な領域に渡る。序論にも書かれている通り、本書を貫くテーマは、第一に、進化論と文化との関係を一方的な影響関係ではなく相互作用として捉えるという観点であり、第二に、この数十年間にわたる進化論の歴史研究がもたらした成果を踏まえて両者の関係を考察することである。

一点目については、科学と文化が共通の場を占めたり共通性に根ざしたりすることによる相互浸透が考察されている。例えば、舞台芸術を取り上げている第6章では、舞台芸術に取り上げられる進化だけではなく、科学と舞台芸術の共通性が考察されている。例として、ダーウィン進化論を擁護した T・H・ハクスリーなどの科学者による講義が、演劇的な営みであることが示唆されている。時には一般の聴衆向けに科学実験という演出を取り入れつつ行われたからである。また、擬態などが、『種の起源』における自然史の語りにおいて、演技に準えられていることにも触れられている。自然を演出するという観点は、註でも挙げられている O'Connor の *The Earth on Show* でも考察されている通り (Ralph O'Connor, *The Earth*

on Show: Fossils and the Poetics of Popular Science, 1802-1856, Chicago: University of Chicago Press, 2007)、チャールズ・ダーウィンが自らの進化論を公表するより前に地質学で展開されたものである。このような観点は、博覧会や博物館における展示に焦点を合わせた第10章のテーマとも通底する。さらに、芸術と進化との関係に焦点を合わせた第5章では、科学者と芸術家が協働する地質学や植物学が、科学と芸術が相互作用する場とみなされている。同じような場に、第3章で取り上げられている写真や第4章で取り上げられている映画も含まれるかもしれない。さらに、第10章で分析されている自然史博物館の建設をめぐる対立も、科学と文化が相互作用する一例と捉えることができるだろう。このような観点が、本書全体を貫くテーマの一つとなっており、有益な視座だと評価できる。

本書全体を貫くもう一つのテーマは、この数十年にわたる進化学理論の歴史研究で見直された進化概念との関係で、ヴィクトリア時代の文化を考察するという視点である。ダーウィンに焦点を合わせることでダーウィン進化学理論が果たした役割を過大評価する結果となった先行研究に対して、1980年代前後からは、ヴィクトリア時代の進化論におけるダーウィン進化学理論の位置づけが再検討され、当時展開されていた多様な進化論に目が向けられることになった。その成果の一つと言える、Peter J. Bowlerによる *Non-Darwinian Revolution* が、序論を初めとしていくつかの論文で引照されている (Peter J. Bowler, *The Non-Darwinian Revolution: Reinterpreting a Historical Myth*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1988 [ピーター・J・ボウラー『ダーウィン革命の神話』松永俊男訳 朝日新聞社 1992年])。Bowlerによれば、19世紀後半のイギリスで人々に受け入れられたのは、進歩する世界という考え方に基づく「非ダーウィンの」な進化であり、ダーウィン進化学理論の帰結である特定の方向性を持たず偶然に左右される進化ではなかった。ランダムな変異のうち特定の環境において有利な形質が選択されて次世代に受け継がれるという自然選択メカニズムは受け入れられなかったのである。さらに、高次な状態への進歩という進化概念と結びついたものとして本書で言及されているのが、低次なものから高次のものへと連なる「存在の大きな連鎖」という観念と、同じように生物の序列と結びついていた、個体の発生過程が進化の系統を辿るという反復説で

ある。このような進歩の思想に基づく進化理論がヴィクトリア時代に受容されていく過程で、本書でも触れられている James A. Secord の *Victorian Sensation* が明らかにしたように (James A. Secord, *Victorian Sensation: The Extraordinary Publication, Reception, and Secret Authorship of Vestiges of the Natural History of Creation*, Chicago: University of Chicago Press, 2000)、1844年に匿名で出版された『創造の自然史の痕跡』が大きな役割を果たしたと考えられている。また、ラマルク進化理論やダーウィン進化理論に影響を受けつつ生物界だけでなく人間社会も含めた全宇宙を貫く進化を体系化しようとしたハーバート・スペンサーは、進歩と進化を同一視する進化論を展開した代表的な人物であり、ヴィクトリア時代の文化にとって大きな存在であった。

ダーウィン進化理論に限定されないヴィクトリア時代の多様な進化理論を明らかにした歴史研究を前提にして、本書の各論文ではヴィクトリア時代の進化理論と文化との関係を考察している。この観点が最も明確に表されているのが、編者の一人である Zon が音楽を取り上げた第8章である。19世紀後半に隆盛した「非ダーウィンの」な進化論を「anti-Darwinism」と「pseudo-Darwinism」に分けた Bowler を受けて、Zon はヴィクトリア時代後期にまとめられた音楽の進化史を「a-Darwinism」と「Pick-'n'-mix Darwinism」に分けている。前者は、1850年代に最初に発表されて展開されていったスペンサーの音楽論に基づくもので、ダーウィンの進化理論に基づく音楽起源論という要素が「欠如」しているものである。音楽の起源を「情熱のほとばしる発話」と考えたスペンサーは、単純なリズムから複雑なオーケストラまで「音楽存在の大いなる連鎖」に沿う音楽の進化を理論化し、前者だけでなく後者の潮流も含めた音楽の歴史記述に圧倒的な影響を及ぼした。後者に分類される音楽の歴史においても、性選択理論に基づいて音楽の起源を説明するダーウィンの理論が部分的に取り入れられているものの、人種の序列に沿って未開社会の単純なものから文明社会の複雑な音楽まで進化してきたとする進歩史観に基づく歴史記述から逃れられてはいない。このような進歩史観に基づき、音楽の進化史が生物の序列に基づく系統樹と同じように樹木のイメージによって表されることになる。第9章でも、建築の歴史が、ヨーロッパ建築を幹とする系統樹モデルで表

され、偶然に左右されるゴールなきダーウィン進化論ではなく、進歩という枠組みで語られがちであったことが示されている。

このような進歩史観に基づいて理解される文化という観点からスペンサーとともに取り上げられているのが、E・B・タイラーからJ・G・フレイザーへと至る、進化という観念と結びついた人類学の流れである。ダンスを取り上げている第7章では、スペンサーとダーウィンの進化理論でダンスに触れられている部分に加えて、ダンスと原始宗教を結びつけるタイラーとフレイザーの進化人類学を概観した後に、Edward ScottとLilly Groveによる二種類のダンス論を考察している。スペンサーの影響を受けた前者のダンス論では、人種の序列や男女の差異が前提とされ、ダンスが未開人種や女性と結びけられる場合にはネガティブな意味が付与される。ほどなくフレイザーと結婚する後者のダンス論では、タイラーを受けてヨーロッパのフォークダンスが未開の名残りだと捉えられ、ダンスの起源を「共感呪術」を発動させる未開人の動作に求める『金枝篇』の議論が引かれている。ここでも、「非ダーウィン」的な進化論に基づいて、ダンス論が展開されているのである。

これまで見てきたように、ヴィクトリア時代における進化と文化との関係を考察する際には、ダーウィン進化論だけに焦点を合わせるのではなく、「非ダーウィンの」な進化という枠組みでも考察する必要がある。このような本書の観点には説得力がある。しかしながら、このような進化概念の再解釈とともに見直されてきた社会ダーウィニズム概念については、残念なことに突っ込んだ再解釈が行われていない。序論でも、「ダーウィンの進化原理を社会に適用する」という従来の定義がスペンサーと結びつけられ、続いてスペンサーとダーウィンの違いを説明するというお決まりの展開となっている。第3章で社会ダーウィニズムの多様性に目が向けられているものの、第3章を初めとして言及の見られる論文では、大文字を用いて表記されている「社会ダーウィニズム」や「社会ダーウィニスト」がアイデンティティとまとまりをもって実在していたという印象を受ける。本書が依拠している *Non-Darwinian Revolution* において社会ダーウィニズム概念を見直そうとした、Bowlerの挑戦を受け止める必要がある。本書の各論文で取り上げられている「非ダーウィンの」な進化に対する考え方と「社

会ダーウィニズム」はどれくらい重なるのか。重なるとすれば、「社会ダーウィニズム」という呼称との齟齬はないのかという問題もある。さらに、本書で議論されている「存在の大いなる連鎖」や反復説、人種の序列や進歩の思想など、進化理論と結びつきつつも区別しうる潮流が「社会ダーウィニズム」とどのような関係にあるのかについても考察する必要がある。「社会ダーウィニズム」が学術的な分析概念としては使えないという私個人の意見は差し引いても、これらの論点も含めた社会ダーウィニズム概念の再解釈は不十分と言わざるをえない。しかしながら、人類と類人猿とをつなぐ「失われた環」の問題性、人間と動物が写真や映画でどのように類比されていたのかという問題、専門家の科学が一般民衆の科学にどのように伝播していったのかという高級文化と大衆文化の関係ともつながる論点、他にも言語と進化の関係性など、取り上げきれないほどの幅広い論点と幅広い文化ジャンルが取り上げられているという点に本書の価値がある。この点と上述した二点の特質を考えると、ヴィクトリア時代における進化と文化の関係という論点に対して意義深い示唆を与える論文集だと言える。

——釧路公立大学准教授